

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊の形をして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二匹連れて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを言いながら、歩いておりました。

「全体、ここらの山はけしからんね。鳥も獣も一匹も居やがらん。何でも構わないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ。」

「鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、二三発お見舞もうしたら、随分痛快だろうねえ。くるくる回って、それからどたつと倒れるだろうねえ。」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまごついて、どこかへ行ってしまった位の山奥でした。

それに、あんまり山が物すごいので、その白熊のような犬が、二匹一緒にめまいを起こして、しばらくうなって、それから泡を吐いて死んでしまいました。

「実にぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬の眼ぶたを、ちよつと返してみて言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしそうに、頭を曲げて言いました。初めの紳士は、少し顔色を悪くして、じつと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら言いました。

「ぼくはもう戻ろうと思う。」

「さあ、ぼくも丁度寒くはなったし腹はすいてきたし戻ろうと思う。」

「そいじゃ、これで切り上げよう。なあに戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を十円も買って帰ればいい。」

「うさぎも出ていたねえ。そうすれば結局おんなじこった。では帰ろうじゃないか」

ところがどうも困ったことは、どっちへ行けば戻れるのか、一向に見当がつかなくなっていました。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

「どうも腹がすいた。さつきから横っ腹が痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまり歩きたくないな。」

「歩きたくないよ。ああ困ったなあ、何か食べたいなあ。」

「食べたいもんだなあ」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを言いました。

その時ふと後ろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。

そして玄関には、「西洋料理店 山猫軒」という札が出ていました。